

『江戸図屏風』から読み解く寛永期の江戸の庭園

小野健吉

一 はじめに

江戸時代の江戸の景観を描いて屏風仕立てとした作品は少ない。そうした中で国立歴史民俗博物館（以下、「歴博」と略称）が所蔵する『江戸図屏風』（以下、「屏風」という）は、昭和四十年（一九六五）にその存在が確認され、昭和五十六年（一九八一）に設立間もない歴博の所蔵に帰することとなった。歴博のウェブサイトで、「江戸時代初期の江戸市街地および近郊の景観を画題として、その中に江戸幕府第三代將軍徳川家光の事蹟を描き込んだ、六曲一双の屏風。成初期江戸の景観を描いた数少ない史料のひとつであるが、絵画の製作年代にはいくつかの説がある」と説明され、画面寸法は片隻一六二・五×三六六・〇センチメートルとある。^①この説明に

あるように、この屏風は都市・江戸の成初期の景観を精細に描いた稀有の絵画史料であり、美術史・建築史・服飾史・船舶史など関連する諸研究分野の視点から解釈され、その成果が蓄積されてきた。こうした研究のあり方について、黒田日出男は一定の評価を下しつつも、「それら〔諸分野が蓄積してきた基礎的な研究成果〕を相互に関連づけながら、絵画史料として分析・総合する方向に進んでこなかった」と批判する。^②「絵画史料学」の観点でこの屏風を読み解いた黒田は、制作年代を「寛永十一年〔一六三四〕～十二年六月」、制作意図と用途については、「寛永九年に「宿老並」となった松平伊豆守信綱が將軍・家光の御成に備えて「家光の御代始め」を題材とする調度として制作させたもので、寛永十四年十月十六日の御成りにおいて信綱邸で飾られた、とする考えを提示した。^③黒田のこの試案については、各研究分野の研究者から必ずしも賛同の立場の表明

があるわけではない一方、いまのところ明確な根拠の上に立つて異を唱える論考もない。景観年代については、黒田に先行して研究を進めた内藤昌や水藤真も黒田と同様に寛永十年末～十一年初頭ないし前半と考えており、本稿でも景観年代についてはこの時期とした上で、論を進めることとする。

本稿が考察の対象とするのは、表題の通り「庭園」である。屏風に描かれた庭園については、これまで黒田や白幡洋三郎、飛田範夫によつて言及されたことがある。黒田は、園池や築山で構成される作り込まれた池泉庭園は大名等の下屋敷に造営されており、下屋敷が接遇の空間としての役割を担っていたことなどを指摘している。^⑤

また、白幡は加賀肥前守下屋敷を事例として取り上げ、文献資料との対比も行いながら、屏風に描かれた図像が一定の写実性・客観性を持つものであると推定している。^⑥一方、飛田は、隅田川沿いに造営された上級旗本の庭園に注目し、これらが隅田川の水を水門から園池に直接取り入れる「潮入り」の構造を持っていたことを指摘している。^⑦いずれも重要な指摘である。本稿は、これらを踏まえつつ、より多くの観点で屏風に描かれた庭園を読み解き、そのことによつて、徳川幕藩体制の基盤たる江戸城下町としての体裁が整った寛永期における江戸の庭園のありようを明らかにしようとするものである。

二 大名屋敷の池泉庭園

池泉庭園が描かれる大名屋敷は、水戸中納言下屋敷、加賀肥前守下屋敷、森美作守下屋敷の三邸。黒田が指摘するように、この時点においては押紙にある通りいずれも下屋敷である。大名が複数の屋敷を持つことが通例になった明暦の大火（明暦三年・一六五七）以前この時期とはいえ、下屋敷を持つ大名は相当数にのぼったはずであり、池泉庭園が描かれた三邸という数は少ないと言つてよいだろう。黒田は、家光の御代始という屏風の性格から、家光が実際に訪れたことのある庭園が描かれているのではないかとの推論を示している。^⑩水戸中納言下屋敷、加賀肥前守下屋敷に家光の御成があったことは記録に残る一方、森美作守下屋敷については、臨時の訪問などがなかったとは言えないが、御成としての記録は残されていない。^⑪いずれにせよ、この三邸だけに庭園が描かれている理由は定かではないものの、当時これらの庭園が名園として世評が高かったであろうことは想像に難くない。以下、各庭園について、描かれた図像を中心に読み解いていこう。

（一）水戸中納言下屋敷

水戸中納言は、徳川家康の十一男で水戸藩主の徳川頼房（一六〇三

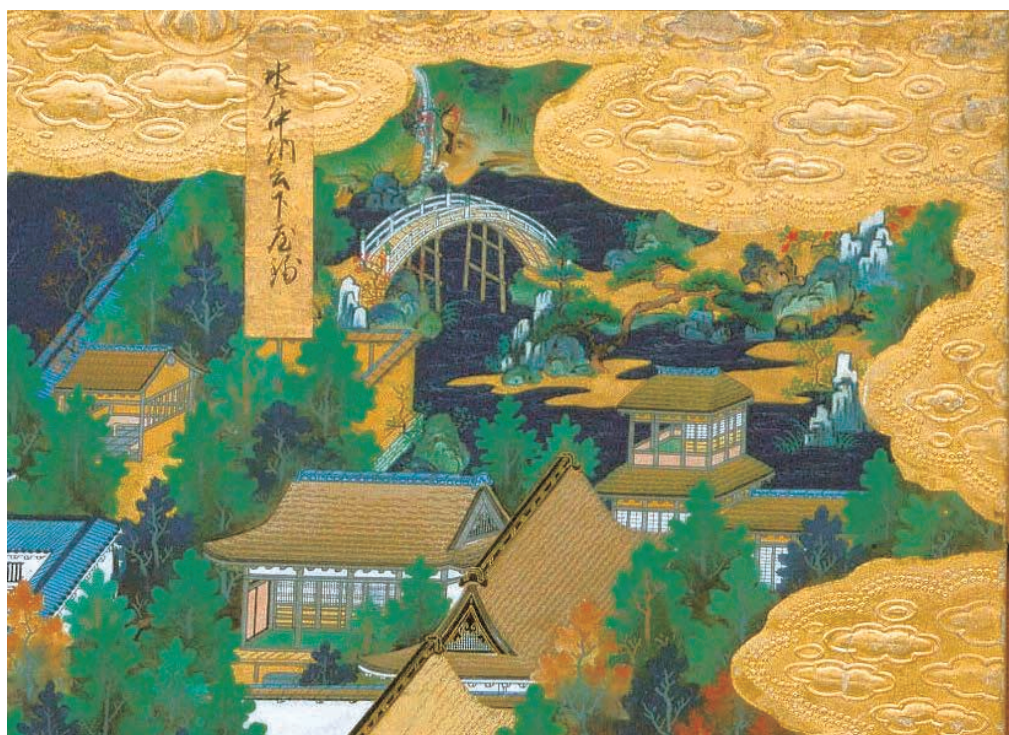


図1 「水戸中納言下屋舗」(国立歴史民俗博物館所蔵『江戸図屏風』から)

（一六六）である。文政十年（一八二八）に刊行された水戸藩の編年資料『水戸紀年』によれば、寛永六年（一六二九）閏二月一日、頼房は兄にあたる将軍・秀忠から七万六六八九歩の邸地を与えられて屋敷を造営、同年九月二十八日に竣功したとされる¹²⁾。また、寛文元年（一七三六）に刊行された『後楽記事』によれば、頼房は徳大寺左兵衛に作庭を命じ、伊豆の「御石山」から奇岩大石を取り寄せ、井の頭から水を引いたという¹³⁾。この下屋敷は明暦の大火後に上屋敷となり、庭園部分はその後幾多の改修を経ながら、小石川後楽園として現在も良好な状態で残されている。以下、屏風の右隻第六扇の右上部に描かれ、「水戸中納言下屋舗」の押紙があるこの邸宅の庭園（図1）を仔細に見ていきたい。

まず、庭園の中心をなす池に関連する形態・意匠に注目してみよう。池に水を注ぐのは、画面の上部左側に描かれた落差のある滝である。滔々と落下する水の前には紅葉したカエデの枝が差し掛かる。滝壺の水分石の周辺で大きく広がった池の両端から出島が張り出し、そこに二組の橋脚で支えられた木造の反り橋が架かる。橋の左手のたもとには立石を含む石組が見える。橋の右手の出島の付け根の入江では、高い位置から池に向かって石が立て並べられ、それに続く水面には岩島が据えられる。金雲で限られた池の右方からは砂州が延び、その先端付近には石組が組まれ、枝振りのよいマツが植わる。砂州の付け根の手前の池水面には数石からなる石組が見える。池畔



図2 現在の小石川後楽園・大泉水（筆者撮影）

の建物として注目されるのは、池の手前の二階建ての数寄屋楼閣である。寄棟の屋根を持つ二階は四面とも腰壁を回したうえ開口部には明かり障子をはめており、庭園の眺望を楽しむ施設であることが窺える。

意匠を凝らしたこの庭園については、『後楽記事』に「大猷公「徳川家光」色々御物数寄有て出来たる御園」とあり、その築造にあたって家光の意向が働いたことが知られている。であればこそ、江戸の上水道である神田上水を池水として取り込むことが許されて十分な水が確保され、大きな園池の造営が可能となったのである。ところで、描かれた諸要素の中で特に注目したいのは、池の中央の砂州である。現在の小石川後楽園の大泉水（池）には、もちろんこのような砂州は存在しないが（図2）、徳川光圀による整備後の姿を描いたと見られる『水戸様小石川御屋敷御庭之図』（明治大学博物館所蔵）には砂州が描かれている（図3）。中島からまっすぐに延び、マツが列植された姿は天橋立をモデルにしたものとも考えられ、初期の後楽園の要をなす庭景の一つであったに違いない。頼房による当初の作庭で造られ、光圀による整備後も姿をとどめたこの砂州は、何時その姿を消したのか。それを示す記録は確認されていないが、元禄十六年（一七〇三）十一月に江戸を襲った元禄大地震（推定マグニチュード八・一）によって崩壊した可能性を指摘しておきたい。いま一つ触れておきたいのは、砂州の先端の見事な形に仕立てられ



図3 『水戸様小石川御屋敷御庭之図』（明治大学博物館所蔵）

たマツである。屏風の景観年代が寛永十一年とすれば、頼房が邸地を賜り造園を開始してから数年を経ただけであり、このような姿に仕立てることが可能だったのかという疑問も生じる。もちろん屏風に描かれたマツは庭園としての記号であり、実景ではないとも考えられるが、必ずしもそうとは言いい切れない。京都では、すでに室町時代に名木級の庭木の移植が足利義政の命令でしばしば行われていたことが記録に残り、安土桃山時代になると豊臣秀吉の縄張り¹⁵で知られる醍醐寺三宝院の庭園でもウメの名木などの移植が行われている。この時代の江戸においても、すでに庭木を移植し、剪定整枝で樹形を作る技術が定着していたと見るのが妥当であろう。

なお、後楽園への家光の御成は、記録の残るものだけでも、寛永十一年（一六三四）三月二十八日¹⁶をはじめとして数度にわたる。

（二）加賀肥前守下屋敷

加賀肥前守は加賀藩第二代藩主・前田利常（一五九四～一六五八）である。利常が幕府から本郷台地に邸地を賜った時期は正確にはわからないが、『越登賀三州志来因概覧』では元和二～三年（一六一六～一七）頃とする¹⁷。寛永三年（一六二六）前後には徳川三代將軍家光御成の内命を受け、殿舎の建築と庭園の築造に着手¹⁸。三年の歳月をかけて念入りに仕上げ、寛永六年四月二十六日の御成を迎えた¹⁹。高台に立地しながらも窪地に湧水があったことから、これを利用し

て池を造り、回遊式庭園が築造されたのである。加賀藩下屋敷は天和三年（一六八三）以降には上屋敷となるが、明治維新後に文部省の用地となり、その後、東京大学本郷キャンパスの敷地となる。大学の敷地として開発される中、園池部分は埋め立てられずに残され²⁰、夏目漱石の小説『三四郎』にちなんで現在は「三四郎池」と呼ばれている（図4）。以下、屏風の右隻第五扇の中央部右寄り上部に描かれ、「加賀肥前守下屋鋪」の押紙があるこの邸宅の庭園（図5）を詳しく見ていきたい。

まず、池の形態とその周辺の地形。汀線が複雑に出入りする池の一带を見ると、斜面が周囲に立ち上がる地形の様相が描かれており、池が敷地の地盤から一段下がったところにあったことが読み取れる。池に水を注ぐのは段をなして水が落ちる滝（画面右上）で、滝の周辺は多数の石が組まれて築山を形成し、滝壺には水分石が見える。滝から池を隔てた対岸（画面中央やや右上）で出島をなすのは、見ようによっては竜の頭部にも見える、文字通りの怪石である。池には中島と岩島が配され、手前の広く平坦な出島の岸边は、緩い勾配で立ち上がる州浜の造りである。また、画面中央やや左下の池の狭まった箇所には一枚ものの切石橋が架かる。植栽では、州浜護岸の出島の手入れされたマツなどとともに、画面左下の五弁の白い花を付けた広葉樹が目を引く。樹種の特定は難しいが、花の大きさが強調されているものの、寛永期に流行したツバキの一品種とも見える。



図4 東京大学「三四郎池」(筆者撮影)

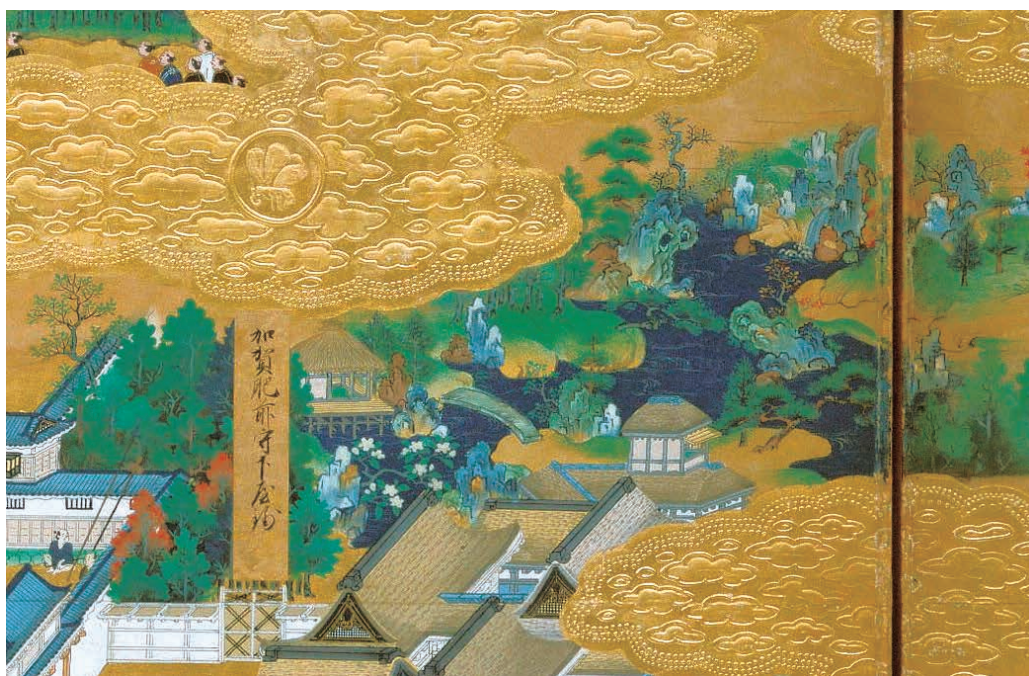


図5 「加賀肥前守下屋鋪」(国立歴史民俗博物館所蔵『江戸図屏風』から)

池に関連する建物としては、切石橋のすぐ左脇の池に乗り出すように建てられた茅葺の四阿（池亭）と出島の手前の二階建ての数寄屋楼閣がある。楼閣の二階は寄棟松皮葺の屋根を持ち、庭園側のみ開口していることから、庭園の眺望を楽しむための建物であることが明確にわかる。

地形を活かした立体的な造形、際立つ怪石、色彩豊かな石を用いて随所に組まれた石組、池に乗り出す池亭など、この庭園は水戸中納言下屋敷にも劣らず凝った意匠を見せる。家光の御成に備え、前田利常が家光に対する接待の場として万全の設えを企図したためであろう。御三家の一つで將軍家と親密な関係にあった水戸徳川家と違い、外様の大藩であった加賀前田家にとっては、御成の舞台としての庭園はひときわ目を驚かすものであることが求められたのであろう。画面では滝から滔々と水が流れ落ちる様が表現されるが、これが実景であるとすれば、その水源はどこであったのか。池底に推定される湧水を用いることはできなかったはずなので、あらゆる手段を尽くして水源を確保し水路等で水を引いてきたと考えるほかない。

なお、寛永六年に続き寛永十七年にも加賀藩下屋敷への家光の御成があったが、この時も御成に備えて庭園の大改修が行われている。²²

（三）森美作守下屋敷

森美作守は初代津山藩主・森忠政（一五七〇～一六三四）である。寛永十九（二十）年頃の状況を記載したと考えられる『寛永江戸全図』²³を見ると、「森内記」すなわち忠政の跡を継いだ長継の下屋敷として、海沿いの方形の敷地が示されている（図6）。この敷地は現在のJ R浜松町駅北西方にあたり、増上寺から見ると東方になる。屏風に描かれた「森美作守下屋敷」が海に臨む立地でないことは明白で、また、増上寺の左手すなわち概ね南方に描かれていることから、『寛永江戸全図』に示された「森内記」邸とは異なる屋敷と見られる。ただし、その場所は定かでない。ここでは場所の詮索には深入りせず、左隻第五扇中央部左寄りに「森美作守下屋敷」の押紙のある邸宅の庭園を見てみよう（図7）。

庭園は、池と築山で構成される池泉庭園である。池は画面手前の建物群側からの出島と対岸からの出島でくびれた位置に切石の反り橋を架け、橋のたもとや護岸の要所に立石を中心とした石組を配している。池の護岸は画面左上の部分で水辺に草を植えた草付きふうの表現がなされているが、建物群側の出島や画面右手の出島などは州浜である。この庭で特筆すべきは、池よりもむしろ築山であろう。画面右上に描かれた築山は高さがあり、しかもその山腹は急傾斜である。築山に植えられているのは、まっすぐ伸びる幹の形状からするとスギやマキといった針葉樹のように見える。池泉庭園の造営に



図6 『寛永江戸全図』の「森内記下屋敷」(矢印)
(『寛永江戸全図』之潮 2007 年。原版は臼杵市立臼杵図書館所蔵)



図7 「森美作守下屋敷」(国立歴史民俗博物館所蔵『江戸図屏風』から)

あたつては、池を掘った土で築山を築くのが一般的である。敷地内での掘削土と盛土の収支をなるだけ合わせるのが合理的だからである。だとすれば、このような高い築山に対応する池は容積が大きいことになる。描かれた池はそれほど広さを感じさせるものではないことを考えると、深さがあるということになる。池には滝が見られない。池の水源として湧水を求め、池を深く掘った可能性も考えられよう。また、植栽では、築山側の出島で枝振りよく仕立てられたマツ、築山の裾と画面左の池岸の満開のツツジが目を引く。庭園内の建物としては、縁を設けた茅葺の四阿が池に向かって建てられているだけで、他の二つの大名庭園や後述する旗本屋敷の庭園に設えられたような二階建ての数寄屋楼閣は見られない。

御三家の一つである水戸徳川家や外様とはいえ全大名の中で最大の石高を誇る大藩の加賀前田家と違い、国持ち大名ではあるものの十八万石ほどの外様大名である森家の下屋敷の庭園が描かれたのはなぜか。秀忠や家光の御成の記録も残っていない。当時、この庭園が世評に高かったとすれば、高い築山と池の組み合わせによるものであろうか。あるいは屏風の発注者（黒田説によれば松平伊豆守信綱）がこの庭園を熟知していたことによるのかもしれない。いずれにせよ、これらも想像の域を出るものではない。

三 上級旗本屋敷の池泉庭園

大名屋敷の池泉庭園が三邸で描かれているだけであるのに対し、大身とはいえ旗本の屋敷の庭園が二邸で描かれているのは、注目に値する。このうち、船手奉行であった向井将監は屏風の主題の一つとも言える「向井将監武者舟懸御目候所」（左隻第五扇下部）に関わる人物であり、その屋敷が描かれ、「向井将監」の押紙が付けられるのは理解しやすい。一方で、押紙はないものの、他の地図資料から米津内蔵助（田盛）の下屋敷と確認できる邸宅で庭園が描かれているのは、あるいはその庭園が特色のあるものとして知られていたからかもしれない。以下、二邸の庭園について、描かれた図像を読み解いていこう。なお、先述したように、この二邸の庭園については、飛田が「初期の潮入り庭園」としての位置付けを行っている。

（一）船手奉行・向井将監下屋敷

押紙にある「向井将監」は、船手奉行を務めた大身の旗本・向井忠勝（一五八二―一六四二）である。秀忠と家光の信任厚かった忠勝は造船の名手としても知られており、家光の御座船である安宅丸（寛永九年着工、同十一年完成）の建造を指揮した。江戸の八丁堀靈巖島に拝領した邸地は船手奉行という役職にふさわしく隅田川に面

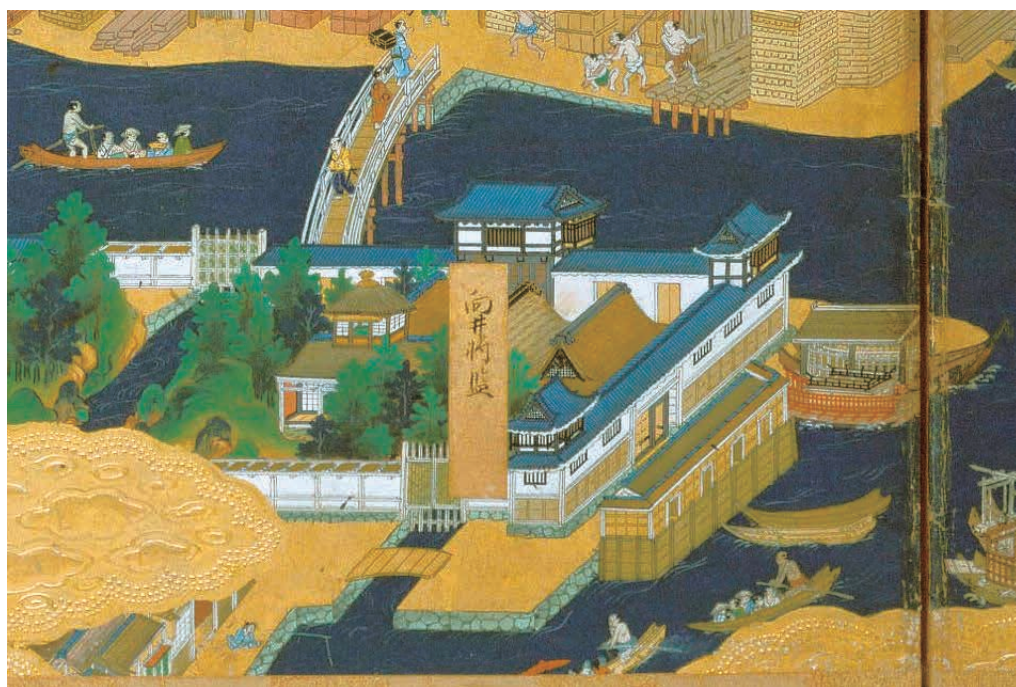


図8 「向井将監」下屋敷（国立歴史民俗博物館所蔵『江戸図屏風』から）

しており、屋敷前への船の接岸が可能な場所であった。なお、現在は、その跡地は完全に市街化されており、往時の面影を残すのは隅田川とそこに注ぐ亀島川（日本橋川の分流）の水面のみである。それでは、左隻第三扇右下隅に描かれた邸宅の庭園を見ていくことにしよう（図8）。

まず目を引くのは、敷地のほぼ中央に位置する二階建ての数寄屋楼閣である。二階は屋根が萱葺き宝形で、側面には明かり障子を巡らせており、庭園や邸外の眺望を楽しむための建物であることは言うまでもない。この楼閣の左手が庭園となるが、中心となるのは、屋敷を貫通しているように見える水路である。この水路は隅田川に合流する直前の亀島川から取り込まれている。すなわち、東京湾につながる隅田川下流の水位の変動がそのまま反映されるものであったと考えられ、飛田が指摘するように「潮入り」の池となっていたわけである。数寄屋楼閣から見た水路（池）の対岸は、一部を石積み護岸とするものの、岸边に立石も用いながら築山に連なる様相はまぎれもなく池泉庭園の景色である。また、水路の数寄屋楼閣側の岸に目を向けると、築山を設け、植栽を施し、さらに石組を配しており、数寄屋楼閣の一階から直接歩み入ることのできる造作となっている。なお、画面下に邸内へと導かれる水路が見えるが、建物や植栽地に突き当たる配置からすると、これは邸内に小舟を乗り付けるための舟入であったと見られる。



図9 米津内蔵助下屋敷（国立歴史民俗博物館所蔵『江戸図屏風』から）

この庭園を家光が何らかのかたちで実見する機会があったかどうかは、定かでない。しかし、船手奉行という極めて特殊な職責を担った向井将監の屋敷にふさわしい立地と空間構成、「潮入り」の池は、世評に高かったと考えてしかるべきであろう。

（二）米津内蔵助下屋敷

屏風に押紙はないが、この屋敷は『武州豊島郡江戸庄図』や『寛永江戸全図』で米津内蔵助下屋敷と確認できる。²⁴ 米津内蔵助は、米津田盛（一六一六―一六八四）。初代江戸北町奉行を務めた五千石の大身旗本・米津田政の嫡男で、父の死により寛永二年（一六二五）に家督を相続。寛文六年（一六六六）には、大阪定番を任せられ河内国で一万石を増増され、一万五千石の大名となった。この邸地が米津家のものとなった時期や経緯は明らかではないが、田盛の生年等を考えると田政の時代に拝領した可能性が大きい。なお、現在、その跡地は完全に市街化されており、往時の面影を残すのは隅田川とそこに注ぐ神田川の水面のみである。それでは、右隻第六扇下部中央付近に描かれた邸宅の庭園を見ていくことにしよう（図9）。

屋敷は画面下の隅田川側に突出部のある変則的な平面形状を持つ。これは庭園に水を取り込むための設えと考えられ、屋敷には途中で二度直角に曲がる直線状の水路で水が導かれる。この水路が画面左側の建物群と右側の庭園を分け、両側は一枚ものの切石の反り橋で

つながれるが、右側の庭園の中心をなす池の水源はこの水路と考え、
て間違いないだろう。左側の建物群のうち水路に最も近い場所に建つ
のが二階建ての数寄屋楼閣である。寄棟屋根を持つ二階は隅田川側
と庭園側が開口しており、それらの眺望を楽しむ建物であったこと
を示している。園池は、左手の水路側の一部が水路と同様の直線の
な石積みであるのを除き、出島と入江の曲線が連続する複雑な平面
を持つ。そのうち水路に架かる反り橋を渡った先付近が最も幅が狭
くなっており、そこに石橋を架ける。岸辺の三カ所に配された石組
は、立石を中心として池に向かう形勢を見せ、石組先端の池中には
岩島を置いてその勢いを示す。植栽では、石橋を迎える出島に植え
られたマツが手の込んだ仕立てでひととき目を引く。また、画面右
手の石組に絡むように植わるのはカエデであろうか。画面右上で木
立をなすのは、主にスギやヒノキといった針葉樹のように見える。
米津内蔵助下屋敷が庭園を含めて詳細に描き込まれたのは、旗本
屋敷を代表する邸宅であることに加え、向井将監下屋敷と同様に
「潮入り」という珍しい庭園を備えていたことがその理由であった
とも考えられよう。

四 その他の注目すべき庭園

前述した三つの大名屋敷の池泉庭園、二つの旗本屋敷の池泉庭園

のほかに、庭園の観点で注目すべき屋敷等を以下に取り上げておき
たい。庭園自体は描かれていないものの庭園の存在が考えられる駿
河大納言上屋敷と内藤左馬助下屋敷、そして将軍が花を楽しむため
に設けたと見られる御花島である。

(一) 駿河大納言上屋敷

駿河大納言は、秀忠の実子、すなわち家光の実弟である徳川忠長
(一六〇六―一三三)。その出自にふさわしく、寛永元年(一六二四)七
月には駿河国と遠江国の一部(掛川藩領)を増加され、駿遠甲の計
五十五万石を領有して家光に迫る権力を有した。寛永三年には権大
納言に任ぜられている。ところが、寛永八年五月に不行跡を理由と
して家光から甲府への蟄居を命ぜられ、翌寛永九年の秀忠死後、改
易となり領国すべてを没収。寛永十年十二月六日、幕命により上州
高崎の大進寺において自刃している。その後、寛永十一年二月には
この忠長の上屋敷の建物は解体されて上野忍ヶ岡に移築されるなど
するのである。すなわち、内藤と水藤が指摘するように、この屋敷
が描かれていることが屏風の景観年代の下限を寛永十一年とする一
つの有力な根拠なのである。⁽²⁵⁾ それはさておき、左隻第一扇上部右寄
りに描かれ、「駿河大納言殿」の押紙のある邸宅を庭園の観点で見
ていくことにしよう(図10)。

屋敷の配置としては、画面下部に御成門と勅使門および殿舎群を



図 10 「駿河大納言殿」(国立歴史民俗博物館所蔵『江戸図屏風』から)

描き、画面上部にはかなり鬱蒼とした木立が描かれる。庭園の観点では、御成門を入ったところの満開のサクラも興味深いが、注目したいのは広葉樹と針葉樹を取り混ぜたように見える木立の中に描かれた茅葺建物である。この上屋敷内の木立はもちろん単なる樹林地ではなく、屋敷内に設えられた山里の景にほかならない。そして、「喜七(または春七)」の扁額を掲げた茅葺建物は「市中の山居」をイメージした茶室であり、木立の中には茶室に至る露地ふうのあしらいがなされていたものと推測される。忠長の屋敷には、寛永二年二月を皮切りに、父の秀忠の御成が七回、兄の家光の御成が五回あったことが



図11 「内藤左馬助」(国立歴史民俗博物館所蔵『江戸図屏風』から)

記録に残る^⑤。武家の儀式として中世以来の伝統を持つ御成であるが、秀忠の御成でとりわけ重視され、御成規式の中に大きく組み込まれたのが茶事である。そのような茶事の場として、茶室と露地は必須の施設であった。一般に下屋敷のように広大な面積を持つわけではない上屋敷では、大規模な池泉庭園を営むことは難しいが、露地と茶室を設けることは十分に可能である。茶事を重んじる秀忠の御成を多く迎えた忠長邸であつてみれば、茶室と露地を備えるのは当然ともいえる。そして、屏風に描かれた茅葺の茶室こそ秀忠あるいは家光の御成の際に用いられたもの、と考えて差し支えないのではないだろうか。

(二) 内藤左馬助下屋敷

内藤左馬助は陸奥磐城藩主・内藤政長(一五六八―一六三四)。家光の覚えめでたかった譜代の大名である。左隻第三扇上部左寄りに描かれた屋敷を見ていこう(図11)。

「内藤左馬助」の押紙のある屋敷は、江戸城外堀の一角をなした「溜池」の池尻に近い池畔に立地する。門を入ったところに展開する建物群のいちばん奥、池に面する位置に二階建ての数寄屋楼閣が描かれる。むくりの付いた寄棟屋根を持つ二階は、おそらく溜池側にも開口されているのだろうが、その反対側にあたる手前も明かり障子をはめた開口が見られ、溜池側だけで



図 12 「御花畠」（国立歴史民俗博物館所蔵『江戸図屏風』から）

なく建物群左手の木立や敷地外の市街地も眺める対象とした造作であったことがわかる。この木立は、駿河大納言上屋敷のありようから考えると、山里ふうの露地の一角をなしていた可能性も小さくない。

この屋敷には、寛永三年（二六二六）五月、同六年六月十日、同八年六月一日の三度、徳川家光の御成があり、このうち後の二度の御成では、家光が溜池で水泳を行ったことが記録されている。加賀藩下屋敷への御成に際し、藩主・前田利常が建物や庭園の造作に心を砕いたことに鑑みれば、徳川譜代の内藤政長とはいえ、いわば屋外でのレクリエーションに訪れる家光のために庭園もそれなりに整えたと考えるのが当然である。例えば、溜池を園池に見立てた池泉庭園ふうの意匠が施されていたことも考えられよう。ちなみに、溜池は、いまは地名を残すのみでその水面は完全に失われてしまっている。

（三）御花畠

屏風で押紙に「御」の文字が使われるのは、

將軍の事跡に直接関わる場所である。²⁸⁾したがって、「御花畠」とは、秀忠や家光が訪れて花を愛でた施設と考えてよい。左隻第一扇上部中央付近に描かれた御花畠は、屏風に描かれた題材の中でも異色であるため、これまで園芸史の観点で取り上げられることがあつたが、²⁹⁾庭園の観点であらためて見ていきたい(図12)。

敷地を囲う漆喰塗の土塀は、屋根が通常の瓦葺ではなく桧皮葺で、この点でもここが通常の住宅ではないことが窺える。画面右手の穴門から入ると、直交する園路で四つに分かれた植栽区画が敷地一面に広がる。絵画のこととて誇張表現という面も差し引く必要はあろうが、実際にもこれに近い敷地構成であつたと考えてよいだろう。

画面で右側の門に近い二つの区画は、草花の区画である。右下の区画にはユリ、ナデシコ、ススキが見え、右上の区画にはアジサイ、キク、ナデシコなどが見える。一方、画面の左手の二つの区画は草花の区画よりも面積が大きく取られており、両方とも複数のツバキが植えられている。下の区画では、花卉の色が白、赤、桃色の三本が横一直線上に植わり、その右下に花卉が青色のもの、左上には赤いものが配される。また、上の区画では、花卉が褐色、桃色、赤色の三本が三角形をなすように植わりその左上には黄色い花をつけた木(ツバキ?)が植わる。二つのツバキ区画の林床には、スミレが見える。また、敷地の左上隅には田舎家風の茅葺の四阿が建つ。室内には床が張られ、しかも畳敷きと見えることから、この四阿は御

花畠を鑑賞するための施設、すなわち、まさに秀忠や家光が訪れた際には陣取った建物であつたと考えてよいだろう。傍らに植わる高木はヤマモモであろうか。

將軍がいわば私的な時間を楽しむ庭園の一つである御花畠。そこでの主役がツバキであつたことを示す屏風の図像は、園芸の愛好者でツバキにとりわけ深い愛着を持っていた秀忠³⁰⁾がこの御花畠を設け、それを家光が受け継いだことを示しているように思われる。なお、ユリ、キク、アジサイ、ツバキなど本来同時に咲くはずのない植物が同じ画面に描かれるのは、平安時代以来の日本の絵画の伝統に則った技法である。

五 寛永期の江戸の庭園の特色

屏風に描かれた大名屋敷や旗本屋敷の庭園を読み解いてきた。その内容についていま一度考察を加えながら取りまとめ、江戸城下町としての体裁が整った寛永期の江戸の庭園のありようについて屏風から得られた結論とし、併せて寛永期の江戸の庭園のおおよその歴史的位置付けについて触れておきたい。

広大な面積を持つ有力大名の下屋敷では、池を穿ち築山を置く見事な池泉庭園が造営された。その機能は、加賀肥前守下屋敷造営の経緯などからすると、当主の楽しみよりもむしろ將軍の御成などへ



図 13 三溪園・聴秋閣（筆者撮影）

の対応が第一義的に考えられたものと見てよいだろう。また、形態的には水をめぐる各種デザイン、すなわち滝や池、護岸の石組や州浜などが大きな見せ場であり、水源の確保が極めて重要な課題であった。地下水脈上に立地し湧水を利用できる敷地では、加賀肥前守下屋敷のようにそれを利用している。そのような立地でなければ、池泉の水を上水道や小河川・都市水路などからの導水に頼ることとなる。水戸中納言下屋敷は将軍家との親密な関係を基盤に上水道の利用を認められているが、これはむしろ例外的であり、池泉庭園造営にあたっては、各大名は水源の確保に大きな努力を払ったと考えられる。こうした中、隅田川や海に面する敷地の邸宅では、水門を設けて、隅田川や海から直接導水する「潮入り」の手法が導入された。屏風では、隅田川畔のいずれも旗本である向井将監と米津内蔵助の下屋敷で潮入り庭園が見られる。そのどちらが先行したのかは定かではないが、飛田が指摘するように、これらが潮入り庭園の先駆的事例であることは確かであろう。そして、これらの成功を受け、その後に小田原藩主大久保家の楽寿園（現・旧芝離宮庭園）などの大名屋敷の庭園で採用されたものと考えられる。

庭園を眺める視点場としてその重要性を指摘しておきたいのは、二階建て教寄屋楼閣である。本論で取り上げたもののうち、水戸中納言下屋敷、加賀肥前守下屋敷、そして向井将監下屋敷と米津内蔵助下屋敷では、二階側面に広く開口部を取った教寄屋楼閣が庭園に

接して描かれており、これらが庭園の景物として眺められる対象であるとともに、庭園を眺める視点場として重要な役割を果たしていたことは疑いない。遡れば南北朝時代の夢窓疎石による西芳寺瑠璃殿を原型として、室町時代の足利義満の北山殿舍利殿（金閣）、義政の東山殿観音殿（銀閣）で庭園に導入され定着した楼閣建築は、寛永期の江戸の武家庭園では、数寄屋の要素を強く加味しながら、必須とも言つてよい要素となっていたのである。溜池畔にあった内藤左馬助下屋敷は、屏風には庭園は見えないものの、数寄屋楼閣が描かれており、庭園の存在が暗示される。以上に挙げたもののほかに、屏風には数寄屋楼閣を八棟見ることができ、これらの邸宅には概ね何らかの形式の庭園が設えられていたと見ることができるかもしれない。そもそも洛中洛外図に始まりこの屏風などに連なる都市図は俯瞰図であり、俯瞰景は景観を理解し享受するのに最も適した視点として評価されていたわけで、俯瞰景を楽しむ視点場として楼閣は強く求められる施設だったのである。ちなみに、当時の数寄屋楼閣の遺構としては、もと佐久間将監（実勝）邸にあったものと伝える建物が横浜の三溪園に移築され、「聴秋閣」として残っている（図13）。

このほか、駿河大納言上屋敷からは室町時代後期の京都に遡る「市中の山居」が、徳川將軍家の茶の愛好とも相まって、江戸の大名上屋敷にも導入されていたこと、また、御花畠の存在から將軍家

がツバキをはじめとする園芸趣味の盛行に主導的役割を果たしていたことが窺え、江戸時代の初頭にあたる寛永期の江戸の庭園を巡る状況の一面を示している。

慶長八年（一六〇三）の開府からおおよそ三十年、屏風の景観年代と考えられる寛永十一年頃の江戸。大名や旗本の下屋敷では様々な手法により水源を確保しながら見事な池泉庭園が造営され、そうした池泉庭園を備えない上屋敷などでは市中にあつて山居をイメージさせる、都市文化の極みともいふべき茶室と露地が設えられていた。そうした庭園では、庭園を維持管理する技術、例えば樹木を剪定整枝して仕立てる技術も確実に定着していた。さらに、花卉を中心とする園芸文化が、いわば江戸の主人たる將軍の先導のもと、文字通り豊かに花開いていたのである。以上のように、この時点ですでに多様で多面的な様相を見せていた江戸の庭園であるが、最後に、そのおおよその歴史的位置付けを行っておきたい。

まず、室町時代後期から京都でその萌芽を見、江戸時代初頭の桂山莊（桂離宮）において確立されたとされる回遊式の池泉庭園の様式がほぼ同時並行的に江戸の大名屋敷にも導入されていたことは、注目に値する。その後、この様式の庭園が大名家による独自性も加えた大名庭園として江戸のみならず諸国の城下町にも多く造営され、各地の庭園文化や造園技術の普及・発展に大きな役割を果たしたことの意義も極めて大きい。また、室町時代後期に町衆の所産として

京都で成立した「市中の山居」が、安土桃山時代に豊臣秀吉に仕えた千利休が侘茶を大成し、江戸時代に入って利休の弟子である古田織部が将軍秀忠の茶道師範となったことなどに伴って武家に浸透し、江戸の大名上屋敷の中にもこうした設えがなされたことは興味深い。さらに、将軍の先導により江戸時代初頭から盛行した花弁園芸文化が江戸時代を通じて庶民にも広がり、極めて高度な発展を見せたこともまた、見逃してはならない点であろう。

註

- (1) https://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/webgallery/edozu/index.html
二〇一四年八月十三日アクセス。
- (2) 黒田日出男「補論・駿河大納言邸門前の猿曳」『王の肖像』筑摩書房、二〇〇九、一五一～一六五頁（初出は、同名書・同題で平凡社、一九九三）。
- (3) 黒田日出男「将軍の御代と祭り」『王の肖像』筑摩書房、二〇〇九、七三～一四二頁（初出は、同名書・同題で平凡社、一九九三）。
- (4) 内藤昌「第一章・江戸図屏風の景観」『江戸の都市と建築（江戸図屏風別巻）』毎日新聞社、一九七二、一三九～一五〇頁。水藤真「江戸図屏風製作の周辺——その作者・製作年代・製作の意図などの模索」『国立歴史民俗博物館研究報告』第三十一集、国立歴史民俗博物館、一九九一、二七～四三頁。黒田日出男・註3に同じ。
- (5) 註2に同じ。
- (6) 白幡洋三郎『大名庭園』講談社、一九九七、八七～九一頁。

- (7) 飛田範夫『江戸の庭園』京都大学学術出版会、二〇〇九、一四七～一五一頁。

- (8) 屏風絵において、各部の名称などを示すために貼られる書き込み。水藤によれば、江戸図屏風では一〇一の押紙が見られ、その内訳は、船名二十三例、屋敷名十九例、情景の説明十二例、地名九例、橋名八例などである（水藤真・註4に同じ）。

- (9) 「武州豊嶋郡江戸庄図」において、複数の屋敷（上屋敷と下屋敷等）を所持する大名は五十家、旗本は十五家である（近松鴻一「武州豊嶋郡江戸庄図」の基礎研究）『東京都江戸東京博物館研究報告』第二号、一九九七、一九九～二二三頁。ただし、同図は下屋敷の存在が想定される江戸の周縁部は描かれておらず、その数は前記をかなり上回るものと考えられる。

- (10) 註2に同じ。

- (11) 佐藤豊三「将軍家の「御成」について（七）」『金鯢叢書 第八集』財団法人徳川黎明会、一九八一、五六五～六二六頁。

- (12) 茨城県史編さん近世史第1部会編『茨城県史料近世政治編I』一九七〇、四四四頁。

- (13) 「後楽園築造」『東京市史稿遊園篇第二』東京市役所編、一九二九、二二八～二四九頁。

- (14) 註13に同じ。

- (15) 例えば『蔭涼軒日録』長享二年（一四八八）二月二十一日条「今日仙洞御庭之松東府江引之」、「義演准后日記」慶長三年（一五九八）五月九日条「成身院庭梅、門跡ノ泉水蓬萊嶋へ渡之了」など。

- (16) 『徳川実紀』大猷院殿御実紀卷二十四「同日条、「直に水戸黄門頼房卿の邸にわたらせたまふ」。

- (17) 「本郷邸」日置謙編『加能郷土辞彙』金沢文化協会、一九四二、七六二～七六三頁。

- (18) 註17に同じ。

- (19) 『徳川実紀』「大猷院殿御実紀卷十三」同日条、「加賀中納言利常卿が上野の別墅にならせ給ふ」。
- (20) 成瀬晃司「庭園・池」『図説江戸考古学研究事典』柏書房、二〇〇一、一二七～一二九頁。
- (21) 明治十年（一八七七）～二十一年に工部大学校および帝国大学工科大学で建築学を講じ、本郷キャンパス整備計画にも携わった英国人建築家ジョサイア・コンドルが日本庭園に対して深い関心を持っていたことが園池保存の一因と考えられる（中島譲・中井祐・内藤廣「東京大学本郷キャンパス育徳園の変遷とその要因」『景観・デザイン研究講演集 No.6』二〇一〇、一一六～一一九頁）。
- (22) 森下徹「第三節・育徳園」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点／第3分冊 考察編』東京大学埋蔵文化財調査室、一九九〇、四七～四八頁。
- (23) 『寛永江戸全図』は二〇〇六年に大分県臼杵市で発見された詳密な江戸図で、旧稲葉家資料として臼杵市立臼杵図書館蔵。記載事項は、寛永十九年十一月から同二十年九月の時期と推定されている。之潮から二〇〇七年に高精細カラー印刷版が刊行された。
- (24) 『武州豊島郡江戸庄図』には「米津内蔵介下やしき」、「寛永江戸全図」には「米津内蔵助下屋敷」とある。
- (25) 内藤昌・註4に同じ。水藤真・註4に同じ。
- (26) 註11に同じ。
- (27) 註11に同じ。
- (28) 水藤真・註4に同じ。
- (29) 青木宏一郎「江戸の園芸——自然と行楽文化」筑摩書房、一九九八、一八～一九頁。
- (30) 徳川秀忠の園芸好きを示す逸話として、『徳川実紀』「台徳院御実記附録卷五」に、「花卉を殊に愛玩し給ひしゆへ、各国より種々の珍品とも奉りけ

る内に、廣島しほりといふ花卉に斑の入たる椿を、接木にして献りしものあり。……」等の記述がある。

- (31) 数寄屋楼閣は、外観においても、例えば屋根を見ると、寄棟・宝形など、それぞれに趣向を凝らしていることが窺える。

- (32) 右隻第三扇に一棟、左隻第二扇に一棟、同第三扇に二棟、同第四扇に二棟、同第五扇に一棟。ほかに、左隻第四扇に道沿いの望楼、同第三扇に江戸城西の丸内の楼閣が見える。

- (33) 『鹿苑日録 寛永元年（一六二四）七月十八日条に「庭中築山鑿池、池中

- (34) 大名庭園では弓場、馬場、鴨場などの武芸と関連する一角を設けることが多く、また大名にとって嗣子誕生が切実な問題であったことから子孫繁栄を願う陰陽石（男性器と女性器を象徴する庭石）を置くこともあった。

謝辞

本稿は、共同研究員として参加した平成二十四～二十五年度の日文研共同研究「日本庭園のあの世とこの世」で行った発表をもとに取りまとめたものである。共同研究を主宰された白幡洋三郎教授（現・名誉教授）ならびに共同研究に参加されたメンバーには、研究会の場などで数々のご指摘をいただいた。また、本稿作成にあたり、学習院女子大学の岩淵令治教授からは江戸時代史について各種のご教示をいただいた。さらに、国立歴史民俗博物館と明治大学博物館には、所蔵資料の図版を掲載することを御許可いただいた。いずれも、記して感謝申し上げる。